

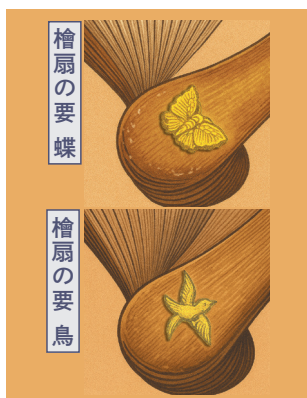
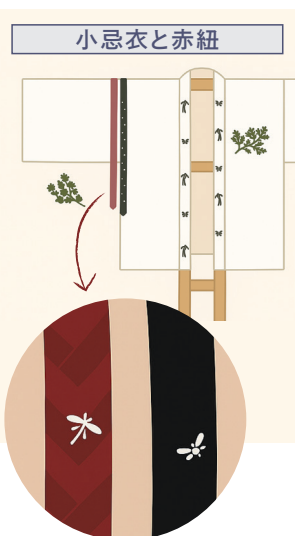
第2回

蝶鳥 (ちょうとり)



「蝶鳥 (ちょうとり)」という文様を見たことはありませんか。蝶も鳥も空を飛べる生き物であることから、蝶鳥はセットで扱われることが多かったと言われています。

舞楽の数少ない童舞 (子どもの舞) でも、※1 左方の演目「迦陵頻」の鳥の舞姿と、右方の演目「胡蝶」の蝶の舞姿があります。迦陵頻とは、極楽浄土に住むという美声の霊鳥「迦陵頻伽」の略称。迦陵頻の番舞が「胡蝶」で春日に舞い遊ぶ胡蝶の姿を表わしたもので、四人で舞います。



裂地画像提供：株式会社誉勤商店
イラスト：編集室作成

その柄の意味、知っていますか？

文様を学ぶ

装束に欠かせない文様の知識。有職故実から生まれた有職文様の数は数え切れない。文様の魅力を深掘りする連載。案内人がお答えします。

文様としても蝶鳥の組み合わせは多くあります。蝶鳥を使った代表的な衣裳に「※2 小忌衣」という装束があります。男女とも共通するもので、采女以外の人々が、装束の上に羽織ります。白麻地に胡粉をひいて、藤に流水・蝶小鳥・柳・梅・雉などの文様を山藍で青摺したものです。小忌衣の右肩に付いているのが赤紐で、赤い平絹と黒の平絹できていて、胡粉で蝶鳥が描かれています。

装飾に使用され、女性や子どもが持つ檜扇は彩り豊かで描画も凝っています。要に使われている金物は蝶鳥であることが特徴的。山科流の檜扇のつくりは要の表が蝶、裏が鳥となっています。

解説

(1) 左方と右方——中国系の楽舞を源流とするものを左方の舞、朝鮮半島系の楽舞を源流とするものを右方の舞と呼ぶ。
(2) 小忌衣——大嘗祭などの儀式に用いられ、束帯や唐衣・裳の装束の上からまとい、清浄(けがれのなきさま)を示すもの。

参考文献

(1) 『有職文様図鑑』(八條忠基著、2020年、株式会社平凡社)
(2) 『十二単のはなし——現代の皇室の装い』(仙石宗久著、1995年、株式会社オクターブ)

監修者

文様の案内人 松井幸生さん

1962年京都府生まれ。株式会社誉勤商店社長で金襴織物・裂地の製造卸商を営む。誉田屋勤兵衛から数えて13代目。「にんぎょう日本」では連載「教えて先生！日本人形の衣裳にとことん迫る」の監修者として活躍。京人形商工業協同組合理事。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。